



コロナ感染がようやく落ち着きを見せてきました。ようやく国内学会はもとより国際学会へも参加できるようになりました。やはり対面での学会参加は意義深いものですね。

著者は来年3月末で大学を退官します。27年間の長きにわたり教授職を務めさせていただきました。精神誌とは、本誌の編集委員会の事務方として1989年からかわらせていただきました。その当時、吉田哲雄先生が精神神経学会の生き字引として活躍されていたことを思い出します。確か編集事務局長を長く務められていたように記憶します。その当時は精神誌に学位論文を投稿し、学位を取得することが精神科医としての夢でありました。その後、少し間隔をあけて細田眞司先生が2代目生き字引として活躍されていたことを懐かしく思い出します。細田先生はその後日本精神神経学会の理事として理事長補佐の役割で学会の近代化に寄与されたことは皆様の記憶に新しいことでもあります。著者自身は精神科医としてあっという間に43年が経過しました。第117回日本精神神経学会学術総会の会長を拝命したときに会長講演で「精神科医として40年」と題してお話をさせていただきました。著者が精神科医を

めざしたころは精神科に対する偏見がまだまだ強く、著者の母親でさえ精神科医になることを嘆いていたような時代でした。それから40年余りの間に阪神・淡路大震災、オウム真理教による地下鉄サリン事件、アメリカ同時多発テロ、東日本大震災などを経験し、世の中が大きく変わりました。心のケアの必要性が声高に叫ばれる時代になりました。隔世の感があります。さらに最近精神障害者の芸術にも関心をもたれるようになり、NHKのEテレで「no art, no life」という番組が放送され、精神障害者や知的障害者の素敵な芸術が紹介され、非常に好評との意見を聞き嬉しく思っております。また2018年からPCN誌の表紙を飾っているのも、それまでほとんど関心をもってもらえなかったアール・ブリュットの作品群です。PCN誌の評価が高まったのは、もちろん掲載論文の質の向上によるのは言うまでもないのですが、表紙を飾る素晴らしい作品群も寄与しているのではないのでしょうか。知られざるものを発掘するのも精神科医の貴重な役割なのでしょう。

(木下利彦)